

分類学者にとっての「文献」

たなか まさあつ
田中 正敦

(商学部助教(有期)(自然科学))

私の専門は生物学で、専攻は動物分類学と呼ばれる分野である。研究内容を一言でいうと、動物の標本を調べ、その名前(学名)を決定し、分類体系の中に位置づける。分かりやすい研究成果の一例を挙げると、標本が現在知られているどの学名にも当てはまらない場合は、その標本の形態的特徴などを記述し、新たな学名とともに論文を発表する。いわゆる「新種の発見」である¹⁾。

文章で書くと至極単純で、簡単そうに見える。実際に、生物学の中でも特に金がかからない分野とされ、標本を詳細に観察するための高価な顕微鏡の購入に必要な初期投資を除けば、研究を始める敷居は低く、特にアマチュアが多い分野でもある。ただし、本格的に分類学的研究を行うのならば、この他にも標本を採集しに行く旅費、標本を保存する容器(標本箱やビン)、標本を固定処理する種々の薬品(エタノールやホルマリン)、標本を観察するための道具(シャーレやピンセット)、標本の学名を調べるための文献、これらを収納し維持管理するための広いスペース、そして何よりも、一見すると人類に直接役に立たちそうもない研究を堂々と行う「分類学者」に対する、周囲の「理解」と「心のゆとり」が必要である。

小文では、これら分類学的研究に必要なもののなかで、「文献」に焦点を当てたい。ある動物の標本を観察し、その学名を決定するためには、対象の動物そのもの、あるいはその近縁種に関する学名や形態的特徴などのあらゆる生物学的な知識が必要となる。その知識を手に入れるための材料が文献である。まず、分類学者は各々の興味関心、能力や環境に応じて、研究する動物のグループ(分類群)や対象地域を絞り込み、自らの「守備範囲」を設定する。そして、その守備範囲(しばしばはみ出ることもあるが)に収まる古今東西ありとあらゆる文献を、徹底的に集め、それらを読み込んで知識を得るのである。

筆者の場合は、環形動物(ミミズやヒルなどの仲間)のうち、海に棲息する分類群を専門と

し、ユムシ類は全世界、ホシムシ類や多毛類は主に日本産種を守備範囲と定めて、分類学的研究を行っている。紙面の制約上、これらの分類群の解説は省略し、筆者の守備範囲における各群の既知種の数だけ取り上げると、それぞれ順番に約180, 50, 1,600である。そして、この範囲内で研究を行うために、筆者がこれまでに収集した文献数は、パソコン内にPDFファイルとして収めている範囲でざっと見積もって約18,000であった。冊子体や複写物など「紙」としての物理媒体で所持している文献を数え上げるのは非常に困難であるが、おそらく2,000くらいはあるのではないかと。もちろん、収集した文献を隅々まで読み込むことは到底不可能であり、内容が記憶の片隅に残るレベルで読んだと言える文献の数は、おそらくこの十分の一に満たないであろう。なお、これらの文献の本文で使用されている言語は、筆者が認識できる範囲では日本語、英語、ドイツ語、フランス語、ロシア語、ラテン語、スペイン語、オランダ語、アフリカンス語、ポルトガル語、イタリア語、デンマーク語、スウェーデン語、ポーランド語、チェコ語、トルコ語、中国語、韓国語、ベトナム語、インドネシア語、タイ語、アラビア語、である。所持している中で最も古い文献は、1558年に出版されたラテン語の論文であった。ただ、自力で読めるのは日本語と英語のみなので、その他の言語についてはOCRとGoogle翻訳等の機械翻訳に頼りきりである。それでも、最近取り組んでいるフラクトゥールで書かれた19世紀のドイツ語論文の翻訳は、OCRの歯が立たず、手強い。

文献は分類学者にとっての命であり、研究に不可欠な材料である。そして、莫大な量の文献を維持管理するとともに、その収集をあらゆる面でサポートしてくれる図書館の存在もまた、不可欠なのである。

1) 岡西政典. 新種の発見: 見つけ、名づけ、系統づける動物分類学. 東京, 中央公論新社, 2020, 256p., (中公新書2589)